

いのちをつなぐSARAYA

～持続可能な社会の実現に向けたサラヤ(株)の企業活動～



サラヤ株式会社 取締役 代島 裕世

サラヤが本日のシンポジウムに招かれたのは、まだJCMに積極的に参加しているというわけではなく、SDGsを企業活動に取り入れた事例を紹介するためだと理解しています。2004年にヤシノミ洗剤の主原料でもあるパーム油の持続可能な原料調達への取り組みが始まりました。ヤシノミ洗剤には1980年代から「手肌と地球にやさしい」という広告コピーが使われてきましたが、「地球にやさしい」の解釈は使用後の廃水が河川に流れ出ても微生物分解しやすいからというものでした。1971年開発当時から1980年代までの主原料はココヤシから採れるヤシ油でした。今はアブラヤシから採れるパーム油、パーム核油です。この原料調達の変化は1980年代後半と言われていて、サラヤは21世紀に入ってマスメディアによって知らされることになりました。「地球にやさしいヤシノミ洗剤が貴重なボルネオ島の熱帯雨林を破壊している犯人である」というTV報道、まさに企業文化を代表するブランドの不買運動の危機でした。

現在パーム油は世界で一番生産されている植物油です。インドネシアとマレーシアの2国で世界の80%以上を供給しているアジアの植物資源です。持続可能な開発という視点で見ると土地1ヘクタールから大豆の10倍の油が採れる素晴らしい植物です。ただアジアにとっては西アフリカのギニア、ガーナ原産の外来種になります。栽培適地が赤道の下という特長からアジアの手付かずの熱帯雨林まで破壊することになりました。CO₂吸収源であるだけでなく、生物多様性が豊かな“いのちのゆりかご”です。サラヤがTV報道取材を受けた地域は、ボルネオ島の東マレーシア・サバ州のキナバタンガン川流域でした。この地域は保護区に指定された貧弱な再生林が点在している状態で、アブラヤシ農園が地平線まで広がる異様な風景です。傷ついた野生動物の姿が世界中に報道されると感情論を巻き起こします。ここには森林適応した世界で一番小さなボルネオゾウが生息しており、この子ゾウが小動物捕獲のために掛けられたワイヤーの罠で遊んでいるうちに前足や鼻が絡まって、ワイヤーを引き千切ったまま成長してしまいます。成長とともにワイヤーが体に食い込んで化膿して敗血症を起こし死亡する例が後を絶ちません。また親を殺されたオランウータンの子どもの映像も世界中に配信されています。特にヨーロッパの

環境NGOが中心となって保護を訴え、世界中のマスメディアが報道しました。

このような状況下で2001年にRSPO(持続可能なパーム油のための円卓会議)の構想が始まり、2003年にRSPO RT(ラウンドテーブル)1が開かれました。サラヤは2005年のRT3から正式メンバーとして参加しています。そしてRSPO認証取得だけでなく、サラヤ独自の環境保全活動を模索しました。

そこで実行したのがボルネオ島の熱帯雨林の回復、生物多様性保全のための新たなNGOの設立です。当時外務省JICAのODAで行われていた生物多様性保全プログラムの成果として2006年に新しい環境保全団体が立ちあがりました。それがボルネオ保全トラスト(BCT)です。民間企業であるサラヤに求められたのは活動資金の提供でした。そこでヤシノミ洗剤等の売上の1%をBCTに目標達成まで無期限で寄付するコース・リレイテッド・マーケティングを開始しました。2007年開始以来、売上が前年を割らずに微増成長しています。ヤシノミ洗剤はRSPO認証クレジット方式(Credits)を取得しています。先端技術のバイオフィアクトant(天然界面活性剤)「SOFORO」を配合した新エコ洗剤ブランド「ハッピーエレファント」洗たくパウダーと食器洗い機用ジェルはRSPO認証完全分離方式(Segregation)を取得しています。RSPO認証取得だけでは現場でボルネオゾウやオランウータンが死んでいく現実には中々改善しません。この現実を見逃さない消費者が企業を突き上げてきます。RSPO認証は上から、ボルネオ保全トラストは下からの改革というイメージを持って活動を継続しています。製造業であるサラヤにとってこの活動はSDGsのNo.12、15、17になります。

SDGs視点でサラヤの本業は何かと言えば感染予防の医薬品メーカーです。SDGs No.3です。サラヤは1952年に緑色の薬用手洗いせっけん液を開発して、戦後の日本を手洗いで復興しようと始まった会社です。ボルネオ環境保全活動を展開していた2009年、この本業の大切さに気付かされる事件が起きました。新型インフルエンザのパンデミックです。人類初のパンデミックを目の当たりにして本業で社会課題解決をやらなければいけないと考えました。2008年からMDGsを

目指したユニセフ（国連児童基金）が開発途上国で石けんを使った正しい手洗いを普及する「10・15世界手洗いの日」プロジェクトを始めていました。サラヤはまずこのプロジェクトを支援することにしました。ボルネオ環境保全活動で学んだことは、ビジネスを通じた社会課題解決でなければ営利企業としては続かないということです。アフリカでのユニセフ支援も最初からビジネスの出口を見つけようとして、将来ビジネスが出来る可能性のある国を支援先を選びました。それがウガンダです。ウガンダはイースト・アフリカン・コミュニティ（EAC）という関税同盟を結んでいる巨大な東アフリカ経済圏のメンバー国でした。通貨統合も目指しています。社内では2050年には日本のサラヤよりも東アフリカのサラヤのほうが大きくなっているのではないかとイメージも持ちながら進めています。このプロジェクトのスタートは日本国内でユニセフ支援対象商品のハンドソープやアルコール手指消毒剤の売上の1%をユニセフに寄付し、現地の状況を消費者へ伝えるチャリティプログラムからでした。2010年にウガンダを初視察しました。ユニセフ・ウガンダ事務所がローカルコミュニティの石けんを使った正しい手洗いの普及活動の状況を案内してくれました。サラヤがリクエストした医療施設視察もアレンジしてもらいました。当時は、診察室、手術室、分娩室などに全くアルコール手指消毒剤がありませんでした。きれいな水も出ないので手を洗うことも出来ません。そこに居あわせたら誰でも水のない病院にアルコール手指消毒剤があったらどんなに役に立つだろうと思うはずです。夕食時になるとウガンダ産の蒸留酒があることに気付かされました。“UGANDA WARAGI”と言います。WHOデータを調べてみるとウガンダはアフリカで一番アルコール消費量の多い国でした。ビクトリア湖北にあるウガンダはアフリカでも有数の農業国であり、アルコール発酵の原料になる穀物が豊富にあります。この国でアルコール手指消毒剤をつくってアフリカに供給すればいいじゃないかという単純な発想から、それを実行しました。まず2011年に現地法人をつくりました。ただし日本の本社から投資することは中々計画出来ません。事業計画の見通しが立たないからです。そこでボルネオ環境保全活動で学んだチャリティとビジネスを組み合わせるサラヤのやり方に倣い、ユニセフ支援をやりながらJICAによるBOPビジネス民間連携という助成金に申請することにしました。JICAから2年で5,000万円という助成金を得て、2012年から現地でフィージビリティスタディを開始。この結果、アルコール手指消毒剤を導入した水の使えない地方の公立病院で、敗血症で亡くなる妊産婦や急性下痢で亡くなる新生児の数がゼロになるというデータが出ました。このデータはWHOからも認められ、ウガンダ国内の公立病院へのアルコール手指消毒剤の普及を保健省も推進することになりました。2014年エ

ボラ出血熱感染症が西アフリカでアウトブレイクした年に現地製造を始め、今もコンゴ民主共和国のエボラ対策のために調達されています。しかし、ウガンダ国内の公立病院での普及には開発途上国ならではの手続きに長い時間を要し、赤字が累積して現地メンバーは疲弊していきました。2017年くらいから徐々に公立病院への導入が進んでいきます。

2020年、新型コロナウイルス感染症がウガンダにも拡がったとき、すでにアルコール手指消毒剤の普及があったので速やかに対応が出来たとも言われています。現地で最も読まれている新聞NEWVISIONにアルコールサニタイザーじゃなく、サラヤサニタイザーという風刺画が出るぐらい、ウガンダではアルコール消毒のことをサラヤと呼ぶようになりました(図1)。

サラヤは、1952年創業から衛生、環境、健康という3つの事業テーマを展開してきました。「健康」事業でのSDGsの取り組みは、カロリーゼロの自然派甘味料ラカントの持続可能な原料調達です。主原料である羅漢果という漢方植物は中国の保護植物で、内陸の広西チワン族自治区の桂林を中心に栽培されています。2015年、この原料調達のために現地工場を建設し、日本のエキス抽出技術を移転し、現地雇用を創出しています。中国は複雑な国ですが、内陸の農民が貧困から抜け出せるように契約買付し、かつ中国産に対する日本の消費者の不安をなくすためにサプライチェーン全てを自社管理して、最終製品を日本国内で製造しています。ラカントは血糖値に影響しない安全安心なカロリーゼロの自然甘味料として、糖尿病や肥満の予防にお役立っていただいています。

「SARAYA SDGs SOLUTIONS」という専用Webサイトでショートムービーを公開しています。今後、JCMについてもサラヤに何が出来るか考えていきたいと思っています。



図1：[NEW VISION]18 March 2020